The Japan Society of Educational Sociology

後発旧制中学の学校文化に関する研究
―岡山県を事例にして―

渡辺一弘（広島大学大学院）

Ⅰ．問題の所在

当時、市内の普通科は県立では朝日と操山だけでしたから、何かにつけて操山を意識し、比較したものでした。校風は、操山の軟派に対し朝日は硬派だと考えられていました。例えば、学級編成は（中略）、成績別、男女別を原則として、進学中心の組み合わせだったようです。操山では男女混合学級が普通でしたから（後略）、

その頃、二中、一女という風潮がまだ完全には脱色されていなかったけれども、「操山高校」としての校風が順次でき上がりつつある時だったと思う。

大学合格率のみが高校のバロメーターとされていたとき、全員クラブ活動強制入部、全校マラソン、クラス旅行、あるいは体育祭、文化祭など学業以外の活動を通じて「人間」の育成に重点をおいた方針は、ライバル「朝日高校」の校風と対照的であった。

これらの文章は旧制中学・高等女学校の伝統をもつ岡山市内の二つの高校―岡山朝日高校（旧岡山一中、岡山二女の後身）、岡山操山高校（旧岡山二中、岡山一女の後身）の校友会誌、学校史から、「校風」に関する記述を昭和30年代前半の卒業生の回想より引用したものである。これらを読むと、両校の間には校風の違いのようなものが存在しているようである。また現在でもこのような違いは存在する、と両校の関係者は指摘している。このような違いはどのように生じているのであろうか。

周知のとおり、明治の中期頃までに開校した我が国の旧制中学の多くは、その源流を藩校や洋学校・私塾にまで溯ることのできる伝統あるエリートのための教育機関であり、質実剛健を旨とするような学校が多かった。それに対して明治の後期から大正にかけての学校増設期に開校した後発の旧制中学は、明治の中期頃までに開校した先発校の教育方針・校風等を模範として形成されていったのであろうか、それとも先発校とは異なる独自のモデルを目指して形成されていったのであろうか。そしてそのような学校の風土は、戦後に後発校の伝統を引き継いだ学校において、学制改革、高校再編、入試制度の変化等に伴いどれほど受け継がれているのであろうか。

従来、明治後期以降の旧制中学の学校文化に関する研究としては、教科のカリキュラムに関する研究（例えば、野地　1979）、自治活動に関する研究（例えば、山下・千葉　1989）、戦時下の生徒に関する研究（例えば、疋田　1990）といったものはいくつか見受けられるが、学校の「校風」や「伝統」に直接的に関係する研究は、学校時代の回想録の類を除くと非常に少ないように思われる。

また黄（1998）は、藩校の伝統をもつ地域のエリート高校において、生徒達がどのように文化様式を正統化し、身体化していくかを、同窓会との関連から学校をみるという新たな視点から、エスノグラフィーの手法を用いて明らかにしたが、果たして明治後期から大正期にかけて開校した旧制中学の伝統をもつ地域の進学校においても、生徒達は文化様式を正統化し、身体化しているのであろうか。先発校に対してのサバイバル戦略として先発校を範とする、もしくは強化した教育方針、あるいは独自の教育方針を掲げたであろう後発校の学校文化を問題にすることは、旧制中学の伝統を引き継いだ新制高校における学校文化の形成に果たした機能をみるうえで意義があり、戦後の地域における高校の評価、学校間格差、入試制度に関わる通学区の問題等の検討―とりわけ多くの地域で「旧一中」が戦後も高校間ハイアラーキーの頂点に位置しつづけて現状を解く鍵になり、これらの点から本研究の意義が見出せる。

以上の問題関心の下、報告者は一昨年と昨年の中国四国教育学会大会と今年5月の岡山地方史研究会月例会において、岡山県を事例にして、後発校の旧制中学の学校文化を旧岡山二中を通して、先発校旧岡山一中の学校文化との比較を中心に、学校史・校友会誌・卒業記念誌等を中心とした記述

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

資料と卒業生・学校関係者への聞き取り調査を用いて検討した。今回の報告は、今までの分析に補足と再分析を加えたまとめであり、他の岡山県下の旧制中学や他の地域の状況も踏まえながら、新たな資料を用いて、後発旧制中学の岡山二中の学校文化を検討することを目的とする。

Ⅱ. 事例研究の対象と分析方法

本報告では岡山一中と岡山二中を分析対象とした。岡山一中は明治7年設立の温知学校の中学養成所が濫觴であり、中国地方最初の公立中学である。戦後旧岡山二女と高校再編による両校統合で、岡山県立岡山朝日高等学校となる。岡山二中は大正10年の開校で、同じく戦後旧岡山一女と高校再編による統合で、岡山県立岡山操山高等学校となる。最初の記述の引用当時、公立高校の岡山学区は岡山朝日高校と岡山操山高校の普通科二校による総合選抜制であった。その後、通学区変更や総合選抜制参加校の増加などの変化は生じたが、総合選抜制そのものは、平成10年3月の入試まで堅持されていた。入学者は、成績・通学距離が公平になるように配分されていた。

今回の報告では、旧制中学の学校文化を「ある特定の学校の持つ、校風や伝統と呼ばれ、正統なものとして学校に規範化されているもの」と操作的に定義し、岡山二中の学校文化を、1. 学校の教育方針、2. 校友会活動、3. 生徒の社会的背景と上級学校進学状況、を次に示した分析資料を通して、岡山一中と他の県下の旧制中学の学校文化と比較検討しながら明らかにする。

Ⅲ. 分析資料(主要なもののみ)

〈岡山一中関係〉

岡山県立岡山朝日高等学校　1984,『回想による110年史　烏城』第140号、1994a,『想い出の120年ー尚志会・生徒会活動の記録ー烏城』第151号、1994b,『岡山県立岡山朝日高等学校　写された120年』。

〈岡山二中関係〉

岡山県第二岡山中学校・岡山県立岡山第二高等学校　1950,『創立三十年史』。岡山県立岡山操山高等学校　1969,『創立七十年史』、1999,『創立百年史』。

〈その他の岡山県の学校関係〉

岡山県立津山高等学校　1995,『津山高校百年史　上巻』、『津山高校百年史　下巻』。岡山県立高梁高等学校　1974,『おもいでの記　おち葉』。

Ⅳ. 分析

本要旨集録では、岡山一中、岡山二中、津山中、高梁中の校友会の比較を示す(表1)。後発校の岡山二中が学校指導の下に成立したのに対し、先発校の場合、時期的に早く開校した岡山一中は自然発生型の成立なのに対し、遅く開校した津山中、高梁中は岡山二中と同様に、学校指導型の色彩が強いことがわかる(分析の詳細と引用文献は、発表当日の配布資料に示します)。

表1　岡山一中、岡山二中、津山中、高梁中の校友会の比較

	名称	成立年	成立事情	特徴	雑誌
岡山一中	尚志会	明治19年	生徒の側から自然発生的・任意な有志の団体から生じた	雑誌出版の他、運動会・演説及び討論会を開き、学校へ制服・制帽の規定の請願活動も行った。途中から(明治28年)、学校長の指導下に入った	「尚志会雑誌」、後に「烏城」と改題
岡山二中	校友会	大正10年	学校発足と同時に、学校指導型の官製の団体として成立	文化部と運動部の各部活動を置く	校友(*第二号までは「會誌」)
津山中	済美会	明治28年	学校発足と同時に成立、成立過程は不明だが学校指導型と思われる	文芸部、運動部、庶務会計部から成り、運動部は生徒全員入部制と希望者の倶楽部があり、文芸部は雑誌・談話の二部になっていた	「済美会雑誌」、後に「鶴城」と改題
高梁中	有終会	明治28年	学校発足と同時に、学校指導型の官製の団体として成立	学術部、談話部、運動部、庶務会計部からなる	「有終」

出典:『岡山県の教育史』、『岡山朝日高等学校　教育史資料』、『創立七十年史』、『操山論叢』、『津山高校百年史　上巻』、『高梁中学校教育要覧』より作成

NII-Electronic Library Service